

史
村
71
り
納
さ
よ
だ
恩
編

地域の民俗を記録すること

恩納村史「民俗編」専門委員
高江洲 敦子

暦のうえでは啓蟄を迎え、植物は芽吹き、虫たちは活動を始める季節になりました。皆さまにおかれましては、清々しい初春をお過ごしのことと存じます。

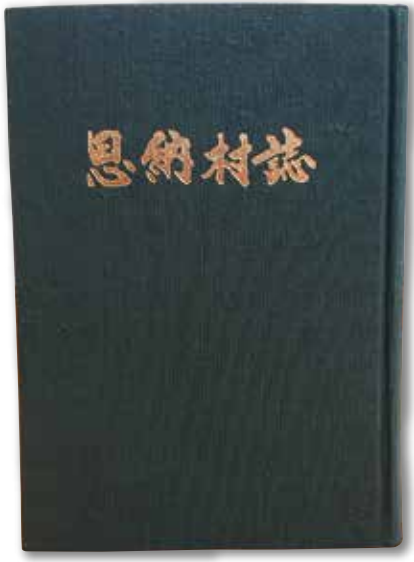
民俗編は始動をはじめ早くも数年が経ちました。事務局の方からは折りに触れて民俗編の編さんに関連する情報を掲載させていただき、村民の皆さまへのご理解とご協力をお願い致しているのは周知のことと存じます。また、2016年度(恩納区・太田区・瀬良垣区)と2017年度(安富祖区・喜瀬武原区)の沖縄国際大学南島民俗研究室の学生による調査に際しましては多くの皆さまからご協力をいただき、民俗編専門委員の一員として感謝を申し上げます。私も、学生さんに負けないフットワークで調査に励まねばと気持ちを新たにしているところでございます。

ところで、なぜ今頃になって昔の生活や年中行事などを調査してまとめるのか、と疑問に思われる方もいらっしゃるのではないかと思います。確かに、調査に向いた先々で「遅いですね、何処どこの誰々さんがお元気だったら良かったのにね」などの言葉をよく耳にいたします。実に的を得たご指摘だと返す言葉も御座いません。

しかし、伝統的な習俗として戦前から戦後へと継承されてきた事象は、戦後70年という歳月の流れとともに、その意味がほとんど分からなくなっ

たものも、数多くございます。そうした事象について再度調査を行い、残された資料などと照らし合わせて検討することにより、その意味を理解することが可能になるかもしれません。幸いなことに恩納村には仲松弥秀先生が手掛けられた『恩納村誌』(1980)が残されています。当時の話者の中には明治生まれの方々もおられ、大正期や昭和初期のさまざまな事柄について聴取し、記録に残されています。

ただし、継承された習俗の意味を理解するだけではなく、『恩納村誌』などに描かれた村民の生活のあり様などが、太平洋戦争という大きな社会的変動を経験した後、どのように継承され、どのように推移し、どのように現代社会に受け継がれてきたのかを見極めることも重要なことだと思



仲松弥秀著『恩納村誌』



名嘉真区のタキヌユーエー
(「国神屋」にて)



仲泊区の清明祭
(久良波大主の墓にて)